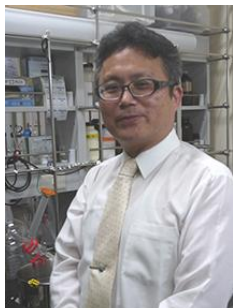


府立大学における研究と教育の国際化について



京都府立大学国際交流委員会 副委員長
生命環境科学研究科 教授 椿 一典

目次

- 1 府立大学における研究と教育の国際化について
留学交流会レポート
- 2 学生レポート
- 3 観光旅行とは違った「テーマのある旅」で海外に
学生レポート
- 4 海外留学インターンシップとキャリア形成
協力学生の声
事務局から「語学学習の勧め」

先日、とある大学の集中講義にいった。7, 8名の受講者のうち、バングラデシュ出身の学生が二名いました。講義はもちろん日本語で行いました。私が専門とする有機化学は構造式が万国共通言語であるため、たとえ言葉が理解できなくても、構造式や反応式を通じて、内容が大雑把に理解できるという大きなメリットを持っています。二名のバングラデシュの学生は、日本語をうまく理解できている様子ではありませんでしたが、一生懸命に私の講義を理解しようと努めていました。また、休み時間には英語で講義の疑問などを話しかけてきました。また日本の学生は躊躇無く英語で彼らと会話していました。その大学の先生と話して判ったのですが、彼らの滞在費は自治体が国際化の名目で負担し、さらに先生が直接に現地の大学を訪問し、

留学希望の研究者と面接し、有望な若手研究者を博士後期課程の学生として迎え入れるシステムがあるとのことでした。先生は、純粋に研究の発展・展開のために、彼らを受け入れたのだが、研究室の学生の間でこんなに英

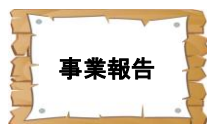
語が広まるとは思わなかった。うれしい誤算・大きなボーナスですと話しておられました。

私は海外留学の経験がなく、英語が大の苦手なのですが、研究論文は英語で書かれているし、我々の研究成果も英語で論文を作成しないと話しにならない。また時には英語で口頭発表する必要もある。否も応もなくコミュニケーションの手段として英語が必要なのです。国際化が英語を話すこととは全く思わないが、研究が深化し普遍性を帯びるにつれ、我々の研究分野では英語での発信が必須となる。

府大に来て7年が経とうとしている。府大は小規模総合大学なので、文系の先生方と一緒に会議も多いが、国際化については、考え方が違うなどと思う点も多い。私は研究室に一人か二人、英語を話すポストドクや博士後期の学生がいて、英語を話す環境があることが大切と考える。また、博士後期の学生は、海外の尊敬する先生のもとで、3ヶ月程度短期の留学を支援する仕組みが大学にあって良いとも思う。一方、文系の先生の多くは、ゼミに所属される前に、できるだけ多くの学生に海外に行き、現地の文化に触れることが良いと考えておられるようだ。当然、それぞれ一長一短があるだろうが、一つに纏めるのではなく、部署ごとに最適と思われる仕組みを早く構築することが大切と思う。

最後に、私から若い研究者や学生に伝えたい事は、月並みながら「若いうちの留学の経験は後々の大きな宝になります」という事です。留学などいつでも行けると思っていると、案外、機会を失します。『若いうちの苦労は買ってでもせよ』です。

第2回留学交流会を開催しました。



平成26年12月1日(月)に京都府立大学国際交流委員会と府立大学生協との共催で、第2回留学交流会を開催しました。教職員6名(ゲストスピーカーを含む。)、府大生26名(内留学生3名)の方々に参加いただきました。

第1部では、生協学生委員会がスピーカーを紹介した後、留学生と日本人留学経験者としてドイツ・レーゲンスブルク大学サマースクール参加者とオックスフォードシティ語学学校留学経験者がスピーチを行い、また、英国で在外研究経験のある同志社大学非常勤講師の阿部先生にゲストとしてスピーチいただきました。様々な形で留学を経験し、皆さん共通して最初は不安もあったが視野が広がったと感想を述べておられました。また、国際交流委員会副委員長椿先生にもご多忙の中駆けつけていただきご挨拶をいただきました。第2部では、文学部のラリー先生にコミュニケーションについて英語で講義を行っていただきました。実際に英語の講義を体験してみて、もっと英語を勉強しようと思った方も多かったのではないのでしょうか。

第3部カフェタイムでは留学交流会参加者が自由に懇談を行い、皆さん和気藹々と話を花を咲かせていました。アンケートでは、留学制度についての要望が寄せられました。ご参加・ご協力いただいた皆様ありがとうございました。

周 琦 生命環境科学研究科 博士前期課程 1 回生 (雲南農業大学留学生)



私は周琦と申します。京都府立大学生命科学研究科修士一年生です。大学二年生の時、雲南農業大学と京都府立大学の交流事業として、京都府立大学に短期研修で訪問しました。それがきっかけで日本に留学することを決めました。

留学を決めた後、最初の問題はやっぱり言葉です。それまで全然日本語を勉強したことがなかったので、すぐに日本語学校に入りました。しかし、日本に到着して飛行機を降りた時、目に入る日本語、耳に入る日本語がまったく理解できず混乱しました。幸い先生が迎えに来てくださったので助かりました。今でも感謝しています。

大学に入っても色々な問題に気がきました。例えば、大学によって勉強内容も違いますので課程の構成は違います。しかし、大きい問題ではありません。一つずつ、頑張れば解決できる問題です。もちろん、先生や研究室のみんなも助けてくれます。

この一年の間にいろんな人と出会いました。やっぱり留学生活は友達が大切だと思います。私は前に留学生ハウスに住んでいたの、色々な外国人と知り合いました。先日は、日本人の家庭に夕食に招待されました。これはどの本ものっていない知識、誰も教えてもらえない体験です。

留学生活は本当に十人十色です。苦しいことも楽しいこともあります、みんな素晴らしい経験です。他の国に行って自分の目で見て自分の手で触れて自分の心で感じないと世界の広さ、留学の楽しさがわからないと思います。

留学交流会は留学したい人にとって、有意義なイベントだと思います。経験者や先生から情報と感想を聞いて少しでも役に立てばよいと思います。

水谷 野々花 文学部 2 回生 (レーゲンスブルク大学サマースクール参加者)



中央が水谷さん

1 か月間のレーゲンスブルク研修は、私にとって初めての海外渡航でもあった。言葉の壁、食べ物の違い、友人はできるのか、など様々な不安が頭をよぎった。しかし、そのような不安はすぐに払拭された。ドイツ語の授業を受け、土地の食べ物を食べ、先生やクラスメイトなどの人々と話すうちに、案外自然とドイツに慣れることができたように思う。日本との違いに頭を悩ますというよりも、「こういうものだ」と思いその違いのひとつひとつを吸収していった。困難に直面したときは、その時できる解決策を取ることだけを考えた。この留学を通じて、不安でよくよ悩む性格が少し改善されたようだった。

美しい街並みの中、周囲の人々の温かさに支えられたドイツでの生活は、大変充実したものであった。留学に際して強い意志や高い目標があるとは言いきれず、初めは研修の参加をためらっていたが、今回に関しては思い切って参加してよかったと心から思っている。この研修に参加したことで、ドイツ語やドイツ文化の学習意欲が高まった。

また、留学交流会で他の留学経験者の体験談を伺い、高い志を持って留学をされた方々ばかりで尊敬の念を抱いた。そのような方々のお話から、今後たくさんのことを吸収していき、自分の経験に活かしていきたいと思う。

荒木 真衣 生命環境学部 3 回生 (オックスフォードシティ 語学研修参加者)



左が荒木さん

私はこの夏、イギリス・オックスフォードに短期留学に行きました。大学に入る前から留学願望は強く持っており、今回留学に行けたことに大変うれしく思っています。どういふわけか自分はレベルの高いクラスに配属され、ペラペラと英語が喋れる外国人に囲まれ、自分の英語のできなさを実感し、大変苦しい経験をしました。しかし、友達や先生に助けをもらいながら何とか必死についていきました。また、放課後や休みの日にはイギリスを思う存分楽しむことができました。多くの場所を訪れ、多くの人との出会いがあり、本当にいい経験ができました。他国の文化に触れることで、日本の良さを再確認したり、英語が喋れる人は世界中に多くいるという認識ができたりして、いい刺激を受け、自分がより一層成長できた経験であったと思います。

12月の交流会では、留学に行くのは文系の人ばかりではなく理系の学生も多く行っていることを知りました。留学で受けた刺激を維持しながら更に飛躍できるよう頑張っている人が多いことも実感しました。私もそのような人たちと同じ様に目標に向かって頑張っていけるように、今回の留学での経験は大切にしていきたいです。

観光旅行とは違った「テーマのある旅」で海外に

公共政策学部 教授 上掛 利博

1954年生まれの私の世代では学生時代に海外に行くのは夢の夢、初めて海外に出たのは1993年、39歳の時でした。生協が設立した「くらしと協同の研究所」の調査で、スウェーデンとノルウェーを2週間訪問しました。府大住居学科の名誉教授の吉野正治先生が団長で、若手の私がツアーコンダクター役、空港やホテルでの交渉もなんとかこなしました（英語は中学の時の「基礎英語」以来もっぱらNHKのラジオ講座のみ。90年代は「やさしいビジネス英会話」が興味深く楽しみに聞いていました）。

1994年に文部省の在外研究員として、ノルウェーに家族とともに滞在しました。トロンハイム大学から京都大学に交換留学で来日した院生をわが家に招いて、子ども達が学校に必要なノルウェー語を習ったり、英語でノルウェーに関する様々な情報を教えてもらいました。当時の在外研究は制約が多く、航空券も53万円の正規運賃で1年間のオープンチケットでした。南ノルウェーのリレサンという人口8,500人の小さな美しい町に滞在して、福祉現場を中心に自治体の仕事を全部見せてもらいました。カメラとメモ帳を持ってあちこち出かけていたので「新聞記者ですか？」と訊かれたこともありましたが、地元の新聞が1面を使って紹介してくれたので有名人に！友人宅の冷蔵庫の中まで写真に撮らせてもらったり、家族ぐるみで自由なライフスタイルを経験したりと、ノルウェーの人たちの「日常生活の質の高さ」を知ることが出来たのは、文献だけではわからない貴重な体験でした。

それ以来ノルウェーには10回出かけています。他に調査に行った国は、スウェーデン、デンマーク、フィンランドの北欧と、アメリカ、カナダ、韓国、中国、台湾の9ヶ国です。観光で行った国は、イギリス、チェコ、ハンガリー、オーストリア、フランスの5ヶ国ですが、観光で行くのと調査で滞在する

のとでは得られるものが異なるように思います。

大学生協が春と夏に開催する

「テーマのある旅」は、現地をよく知る専門家が訪問先を厳選し、レクチャーもあって学ぶことができるという点が興味深いものです。2015年2月～3月のヨーロッパ関係の旅は、誰もが人間らしく生きる社会を実現した「デンマークの社会福祉」、発達保障の先進国で安心平等の子育てをする「フィンランド幼児教育・保育」、多様性の尊重と世界一の教育制度を学ぶ「フィンランド教育関係視察」、子どもの幸福度世界一から学ぶ「オランダ教育・社会視察」、「ドイツ自然エネルギー政策とまちづくり視察」、ポーランド・チェコ・オーストリア・フィンランドを巡る「ヨーロッパ・ピーススタディツアー」など7コースです（他にアメリカ・南米4コース、アジア10コース）。

デンマークでは、『モア～あるデンマーク高齢者の生き方』『福祉の国は教育大国』などの著書がある小島ブンゴード孝子さんの案内で8ヶ所の福祉現場を訪れ、デンマークの市民と直接触れあうなかで、世界一の高税国がどうして国民に幸せを与えることができるのかという疑問点に迫ります。観光だけならいつでも行けますが、このような「テーマのある旅」で学ぶことができるのは学生時代ならではでしょう！全国から集まった学生と友達になれるのも有益です。若い時に外国を訪問して学ぶ体験には「目から鱗」なことが多く、視野を広げ人生を豊にしてくれるに違いありません。特に、府立大学のような小規模の大学の学生さん達にとっては嬉しいプログラムです。青年よ、テーマをもって海外に出かけてみませんか？



デンマーク～テーマのある旅に参加して～

公共政策学部 2 回生 高山 結

私は、1回生の春休みに「デンマーク社会福祉視察研修」の旅に参加しました。高税国・高福祉で有名なデンマーク。授業で学んだ高福祉の国を自分の目で見て、体験したい、そう思いこの旅に参加しました。児童福祉・教育、障がい者福祉、高齢者福祉まで、幅広いテーマで視察研修をすることができました。

初めての海外だったので、行く前は不安でいっぱいでしたが、デンマークで過ごす時間はあっという間に過ぎてしまいました。日本とは異なる考えをもつデンマークの人たちが行う福祉は本当に素晴らしかったです。しかし、デンマークのことを知っていくうちに、自分は日本のことを何も知らないのだと気づきました。デンマークで学んだことを整理しつつ、日本のことももっと知っていかなければならないと思いました。

また、参加者は1回生～4回生まで幅広く、専門もさまざまでしたが、みんな意識が高く、一緒に話をしているととても勉強になりましたし、楽しかったです。回生を超えて仲良くなれました。特に、同室だった人とは、今でも交流が続いています。

私はこの旅に参加し、本当に多くのことを経験し、学び、得ることができました。素晴らしい仲間に出会えたこともとても嬉しく思います。大学生の間にもっといろんな国に行きたいです。



海外留学・インターンシップとキャリア形成 キャリアサポートセンター特任准教授 小山 裕子



海外体験をキャリア形成において実りあるものにするためには、ラリー先生もおっしゃっていましたが、まず留学及び海外体験の目的を自分なりに明確にすることが最初のステップです。また現地では失敗を恐れずに自ら進んでいろいろなことに挑戦し、経験を積むことが大切になります。外国では、当然ですが行動すればするほど、様々な問題や困難にぶつかると思います。その際に、いろいろな状況で多様な人とコミュニケーションをはかり、問題解決を一つずつしていくことが必要になります。語学力はその過程でもついていくと思いますが、Communicative competence すなわち英語によるコミュニケーション能力が非常に重要になってきます。この能力はグローバル人材として欠かすことのできない能力であり、海外展開している企業や団体が強く求めていることでもありますので、是非意識して伸ばしてみてください。

また海外体験を就職活動に活かす場合は、自らの経験を言語化して伝えることが必要となってきます。視点としては、何の目的で行って、どのような経験をして、そこから何を学び、自分がどのように変化あるいは成長したのかということになります。一度、文章にしてみても、自分自身でまずその意味付けを明確に行い、相手にも伝わるような形で表現することをやってみてください。Good Luck !

ひとこと感想

協力学生の声 ～留学交流会を開催してみた～

生協学生員会／地域連携センター学生部会 「かごら」

- ・留学について色々な興味深いお話がうかがえる貴重な機会を得ることができました。
- ・留学交流会のお手伝いをさせていただき、経験者の方から詳しくお話を聞くことができてよかったです。当日は先生や留学経験者の方と交流でき、楽しかったです。
- ・今まで留学には興味を持ってなかったが、大学生のうちに海外に行き視野を広げたいという思いが芽生えるようになっていっています。
- ・今回の企画は、留学経験のある人の参加が思った以上に多くて、ラリー先生の英語講義も難なく理解されているようで、英語の分からない私は、ただ刺激ばかり受けておりました。スピーキングの練習、がんばります。
- ・参加者が多くて驚きました。また、府大生の中にも留学経験者がこれほどいると思っていなかったです。
- ・これまで、留学をする学生は欧米言語文化学科が多い、というイメージを持っていたのですが、他学科の学生も積極的に留学へ取り組んでいるということを知りました。一緒に参加した一回生のメンバーも同じことを言っていました。



ほっと一息

～語学学習の勧め～ 事務局から

みなさんは外国語を勉強することについてどう思いますか？私の場合、どんなふう外国語、とりわけ英語に関心を持ってきたのかご紹介しましょう。

今思えば、子供の頃読書好きだったことがそもそもの始まりだったように思います。マーク・トウェイン、ドリトル先生、ポワロやシャーロック・ホームズなど外国小説も沢山読んできました。英語の教科書に、小説の一部が掲載されているのを読んだとき、あの胸躍る外国小説はもともとこんなふう外国語で書いてあり、私はその翻訳を読んでいたのだ！と思うと英語学習への憧れがつのりました。

高校・大学と国際関係の学部を選びましたが、大学の最初の英語授業の教材が難解でさっぱりわかりませんでした。ゼミの先生に、先生のフィールドにみんな来ないか、と言われたとき「私は英語をもっと勉強したいのです。」と答えると「それでは英字新聞をみんなで読みましょう。」ということになり、毎週月曜日のお昼休みにみんなで集まって、英字新聞を読むことになりました。英語だけでなく、国際社会情勢など解説していただき、とても思い出深い授業でした。その後色々な国に行き色々な人と会うことができましたが、いつも、やっぱりまだ勉強不足だなと思っています。平凡な言葉ですが、「努力しても成功するとは限らないが、成功している人はみんな努力している。」と努力を重ねています。

企画課 川崎 さわか

発行日 2015年1月

発行責任者 国際交流委員会委員長 川瀬光義

〒606-0823 京都市左京区下鴨半木町 1-5

TEL: 075-703-5905 Email: IECC@kpu.ac.jp